NewsLetter 2013.1 月号 vol.6

京都府立医科大学 男女共同参画推進センター NewsLetter

2013.01 vol.6

文部科学省　科学技術人材育成費補助金　女性研究者研究活動支援事業（女性研究者支援モデル育成）ーしなやか女性医学研究者支援みやこモデルー

トリアス祭特別企画講演会

平成24年11月２日(金) 17時30分～19時
京都府立医科大学旧附属図書館棟 3階　階段教室（西）
第１部　講演会「医療者における仕事と家庭の両立」～病児保育はなぜ必要?!～
講師：京都府立医科大学小児科学教室 講師　三沢　あき子 先生
京都府立医科大学皮膚科学教室 学内講師　浅井　純 先生
京都府立医科大学眼科学教室 大学院生　福本　暁子 先生
第２部　座談会
総合司会：神部 宏幸さん　京都府立医科大学医学部医学科 ４回生

はじめに　伊東　恭子 先生　京都府立医科大学　分子病態病理学　准教授

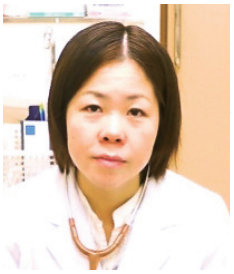
「こども」が設立されて今年で２年目を迎えます。「男女共同参画」という言葉はこのような活動が続けられてきて、ようやく教職員、あるいは学生さんの中にも少しずつ、その活動が何であるかということが理解されてきたのではないかと思います。「男女共同参画」という活動は国際的な企業ではずいぶん前からすでに行われていて、企業が多様性を増していくために女性の労働を確保するという動きがなされてきました。

我々の職業は時間的な区切りをつけにくいという特殊な職場環境ではあるのですけれども、いわゆるワークライフバランスの重要性というものが見直されるようになってきています。我々の「男女共同参画」の最初のテーマは「女性研究者支援」ということでした。でも本来は男性も女性も、自分の礎となるような家庭を築いて、そこに足場を置いてキャリアアップを図っていく、つまり人生も仕事も充実した生き方ができるような環境づくり、システムづくりということを目指していくのが不可欠であると考えます。

このような特殊な職場環境であってもワークライフバランスというのは非常に重要なわけです。そのためにわれわれは何をしていくのか、ということですね。例えば私が学生時代の頃には「ワークライフバランス」というような言葉すらなかったのですが、今、教職員や事務の人たち、これからの医療を担っていく皆さんの中にもその言葉が浸透してきたのは非常に喜ばしいことではないかと思います。

今日は子育てをしながらキャリアアップを実際にしてこられた先生方のお話が聞けると思います。この話を聞いて、よりよい人生、そして仕事の充実を図ることができるように何らかのヒントを得ていってもらえたらと祈念します。

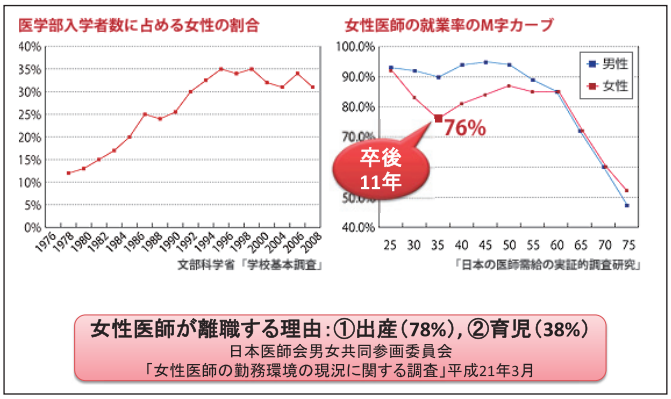
第1部　講演会　『医療者における仕事と家庭の両立』～病児保育はなぜ必要?!～



三沢 あき子 先生
小児科・講師　平成５年卒
子ども２人（７歳，４歳）

1990年代前半から医学部入学者に占める女性の割合が３割を超えて増えています。しかし、男性は医学部卒業後9割以上が就業を維持していきますが、女性は卒後11年まで就業率が下がり続け、76%まで下がります。これは出産・育児のために離職してしまうからです。京都府立医科大学医学部卒業者就業状況に関する調査では、女性医師・研究者が、十分に能力を発揮し、仕事を続けていくために必要な支援として、病児保育室の継続が最も多い要望でした。

私も出産をするまでは男女差を感じたことはなかったのですが、子どもを出産すると大変な状況が待ち受けていました。子どもを保育園に預けている間は普通に働けるのですが、一番困るのは子どもの急な発熱です。最初は近くの叔母や遠くの母を頼りにしていたのですが、二人とも体調を崩し、ベビーシッターさんにもお世話になったのですが、急な場合は断られることもあります。また、民間の病児保育も使えないという状況で、当時勤務していた京都大学に病児保育室ができましたが、府立医大に帰ってくると何もありませんでした。平成22年に文部科学省の女性研究者支援モデル事業に採択され、この中で病児保育室「こども」を昨年の7月に開室しました。



「こがも」の工夫としては、安心して使いやすくということで、web予約システムを導入し、登録者はパソコンで空き状況を確認し、24時間予約できます。子どもが病時に知らない所、知らない人に預けられるのはストレスになるので、元気な時に慣らし保育的な機会を作っています。お昼ごはんもオークラさんに「こがも」特製お子様ランチを作ってもらい、好評です。また、陰圧換気の入った隔離室を設置し、感染症の管理もきちんと行えます。

感染症の児を受け入れるということは、リスクを背負い、大変ですが、子ども達にとってより良い環境を整備し、親子ともに安心して利用できる病児保育室でありたいと思っています。

医療職がほとんどで育休が取れない、取らないという状況を反映して、利用児の年齢は0歳児が22%、１歳児が49%と1歳以下が7割を占めています。登録者は今年度は76人で、３分の２が医師で、３分の１が看護師さんです。

京都大学時代の恩師に「長期的ビジョンを持って、10年後を見据えていきなさい」という言葉をいただきました。「キャリアを途切れさせないように」と言われ、大変な時期を乗り越えたからこそ、今があると思っています。

今年の２月にWHOのジュネーブ事務局に行ってきました。WHOは女性が働きやすいところで、19の管理職ポストのうち女性が７人を占めています。子育てをしながら仕事をしていくのが当たり前という雰囲気でした。

最後に皆さんへのメッセージですが、自分自身が本当にやりたい道を選んでいただきたいなと思います。子育てから得られるものも財産ですし、本当にしんどい時期は一時期で、それを乗り越えるとその先が広がってくると思います。乗り越えた世代が次の世代を支援し、良い循環ができて継続しやすい環境になることを期待しています。

浅井　純 先生
皮膚科・学内講師　平成13年卒
子ども２人（２歳，０歳）

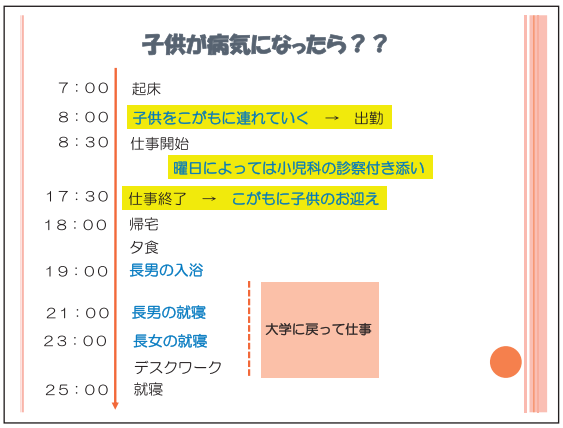
男性医師の立場から話をします。女子学生の皆さんは、将来もし男性医師と結婚したらどうなるかという感じで聞いていただければと思います。

私は皮膚科の後輩の女医さんと結婚しました。そして長男が生まれ、今年の8月に長女が生まれ、現在妻は育休を取っています。今は妻がずっと長女を見ており、長男の面倒は保育園の送迎含め、朝起きてから寝るまで、私が見ているという状態です。子どもが寝てからデスクワークをして1時ぐらいに寝ますが、子どもをお風呂に入れた後、大学に戻って仕事をする場合も多いです。

妻と私の親は兵庫と大阪に住んでおり、現役で仕事をしているので、子どもに何かあった時に助けは頼めないので、病児保育室「こがも」があるおかげで、子どもの体調が悪くなっても仕事が順調にできているという状況です。

卒後研修制度というものが変わってから、若手医師の結婚が早くなり、既婚者率が増え、医師同士の結婚が増えてきていると思います。ですから、男性医師も育児にすごく携わらないといけません。公私ともに非常に忙しい若手医師のキャリアアップのために大学内に病児保育があるのは有難く、欠かせないものだと感じます。

最後に、現在は育児に携わる女性医師への支援は充実してきていますが、育児に携わる男性医師が増え続けている中で、男性医師へのサポートもぜひ推進していただきたいと思います。



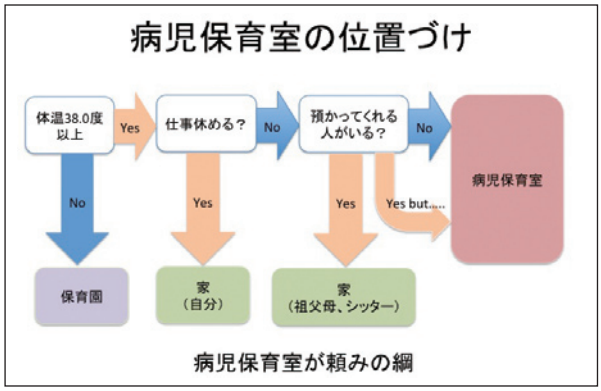
福本　暁子 先生
眼科・大学院生　平成14年卒
子ども２人（３歳，２歳）

女性医師の立場から話をします。昨年度「こがも」の利用が第１位だったために今回の話をいただいたので、仕事・家庭の両立と現状はほど遠いのですが、そういう話として聞いてください。

我が家は料理上手な眼科医の夫と３歳の長男、２歳の長女の４人家族です。「こがも」ができるまでは子どもが熱をだすと遠方の実家の母と民間の病児保育に頼っていました。しかし病児を預けて働くことで家族に負担をかけているなどの精神的負担がきつかったのです。しかし子どもが喜んで「こがも」に行くようになったことで預けて働くことへの罪悪感から開放され、仕事に対して前向きな気持ちになれました。

「こがも」には応援して下さる気持ちが詰まっています。ベテランのスタッフの先生方はきめ細やかな保育はもちろん、親の体調にまで配慮してくださいます。疲れた時は連絡票や子どもの作品に添えられたメッセージを読み返して支えにしています。画期的な24時間オンラインの予約システムがあり、インフルエンザでも預かっていただけるなど、保育の内容と利用しやすさを合わせると全国トップの病児保育施設ではないでしょうか。

仕事をしていると子どもにかける時間が少なくなるので、一緒の時間をより楽しく過ごせるように工夫しています。自分にかける時間はさらに少なくなるので、学生時代の自由な時間は今から思うと貴重です。男性も料理など生活に欠かせない力をつけたり、留学して語学を学ぶ、日本の文化に触れるなどいろいろな価値観を身につけておくことは大切だと思います。



第2部　講師の方々を囲んでの座談会

Q1: 浅井先生に伺いますが、結婚される前と後とで、子どもができる前後で家事を協力するという意識は変わりましたか。

浅井先生: 私の妻も医者なので、結婚すると決めた時点で、共働きになるので子どもが生まれる前から、家事や育児を手伝うことには抵抗はありませんでした。

Q2: 医師と結婚して家事を分担する上で、一番大切なこと、心得ておいたほうがいいことはあるでしょうか。

浅井先生: 波風立てないようにすることです。

福本先生: 男性は得意なことはやるけれども、不得手なところはしない傾向があるように思うので、得意分野を作っておくと妻としては有難いです。感謝し、お互いに思い合っていくことが大事かなと思います。

Q3: 一般に仕事をしていると家事にあまり時間を割けないし、特に医業は社会的サービスなので仕事優先になると思いますが、職場でサポートを受けているということが感じられますか。

浅井先生: 皮膚科は女医さんが多い科なので、医局全体でサポート体制はあります。例えば、入院患者さんを看るのを主治医制からチーム制に変えたり、育児が大変な時期は入院患者を持たず外来だけをするというようなことです。

福本先生: 眼科は、出産後１年は当直免除という制度がありました。年度毎に事情は変わりますが、当直に大学院生が入っていた年には代わりに日直をさせてもらうなど、周りに助けてもらっていることがたくさんあると思います。

三沢先生: 小児科は、子どもができると一時大学を離れて子育てと両立できるところに異動する人が多いです。

Q4: 先生方は学生のころに、将来いつ結婚をして、いつ子どもを産むということを考えていらっしゃいましたか。

三沢先生: 私は全く考えていませんでした。若くて結婚する人が増えているようですが、私もそのあたりを伺いたいと思います。

浅井先生: 私自身は全然考えていませんでした。ただ、今の世代の人たちは、専攻医、卒後1年の間に結婚してしまう人が増えているので、ある程度考えている人が多いのかなという気がします。

福本先生: 私の学年でも卒業直後より30代前半で結婚した人が多かったと思うので、今の世代の人たちとは少し状況が違うかなと思います。

Q5: 男女共同参画推進センターは病児保育をはじめ、基本的に仕事と家庭を両立する女性をサポートしていると思うのですが、それと浅井先生がおっしゃっていた男性医師へのサポートとでは何が違うのですか。具体的にどうしてもらいたいのでしょうか。

浅井先生: 例えば子育てをしている女性には、女性の研究者限定のポストがあったり、実験助手さんを付けてもらえるのに、子育てをしている男性にはその資格がないのです。家庭ではイーブンのつもりで育児をしているのに、不公平だなと感じます。そこの現状を理解してもらうのは難しいのですが、男性がもっと家庭のことをやって、男女間が平等に仕事も家事もやる時代になれば、そのあたりも変わってくるのかなと期待はしています。

Q6: 病児ではなく普通の保育所の必要性についてどう考えてらっしゃいますか。

三沢先生: 以前は院内保育所があったのですが、利用者が減って閉鎖されました。今は近くの民間の保育所に預けている人が多いですが、途中入所が難しく、今後の課題になると考えています。

アンケートから

○医業においても、イクメンへの社会的サポート、ワークシェアリング等が求められていると思う。男女共同参画に向けて、国内他大等に発信できる先進的な取り組みに期待。
○病児保育所の存在も初めて知った。知らないことばかりだったので、将来を考える上での貴重な機会となった。
○「こがも」の存在が就労/生活意欲の強力なバックアップとなっていることがわかった。
○年齢が比較的近い先生で、とてもためになった。
○毎回いつも考えさせてもらっている。興味深い内容だった。
○女性医師として、非常に参考になったとともに、仕事と家庭の両立を頑張っていきたいという気持ちになった。

フューチャーステップ研究員を拝命して　平成15年卒　牛込　恵美（内分泌代謝内科学）

平成24年4月よりフューチャーステップ研究員（以下FS研究員）を拝命いたしました。FS研究員に就いた経緯、またその後について、簡単に記させていただきます。

臨床研究開始～研修員

平成19年に大学院に入学、２年目より臨床研究（２型糖尿病患者における家庭血圧の疫学研究）を開始いたしました。大学院３年目のときに結婚、妊娠しました。大学院卒業後、研究をもう少し続けるようスタッフの先生方に勧めていただき、研修員となりました。

しかし、「無職のバイト生活」という意識ではありましたので、今後どうしていけばいいかと考え、気持ちの上でも落ち着かない状況でした。臨床にどういう形で（周りに迷惑を極力かけずに）戻れるのか、など考えて（悩んで）いた時、男女共同参画よりFS研究員の募集があり、中村教授より応募するよう連絡をいただきました。

女性研究者の研究の継続と育児等の両立支援の一環として設立されたFS研究員は１年契約、週28時間の非常勤短時間勤務をするもので、研究支援員の制度もあり、研究室のためにもなりますし、即応募いたしました。

FS研究員

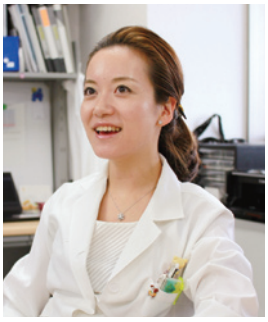
FS研究員になる前後で仕事内容は特に変わっていません。ただFS研究員に就かせていただいてからは、今後について悩むことがなくなり、研究に対する責任感、意欲が高まり、集中して研究に取り組むことができました。7月から来ていただいている研究補助員の方には、データ入力などしていただき、仕事の効率が大幅にあがっています。

感想

FS研究員は、子育て中で目いっぱい仕事ができない女医の居場所という意味では大変価値があると感じます。身分が分かれているということにも大きなメリットがあると思います。子育てのためとはいえ、同じ身分でありながら同じように働けないことはストレスになり、お互い気を使い、時にはトラブルのもとになるかもしれません。（そうならないようにと、身を引いてしまう女医は今までも多かったのではないでしょうか。）その点、違う身分であれば、そのような余計なことを考えず、研究や仕事に集中できると感じました。

また、研究補助員の存在は、研究の補助だけではなく、時間不足（好きな時間まで仕事ができない状況）からくるストレスの軽減にも大きな役割を果たしていると感じます。

FS研究員制度が存続すれば、今後の女医が、子育てをしながら研究のモチベーションを保てる機会が増えるのではないかと思います。



今回、府立医大で初めての試みであるFS研究員に就かせていただいたことは貴重な経験であり、大変感謝しております。任期はまだあと３カ月ありますが、この９カ月、集中して楽しく仕事ができ、満足できる一年となりました。

本当にありがとうございました。

●こがもクリスマス会を開催しました。（平成24年12月8日）

１～11歳までのお子さん21名、保護者14名が参加されました。まず、クリスマスリース作り・壁面クリスマスツリーへの飾りつけです。みんな真剣に取り組みました。次に、お楽しみお店屋さんごっこです。魚釣りゲームやケーキ、おにぎり、指輪・新幹線・アンパンマンお面などならんでいます。みんなオモチャのお金で上手にお買い物ができました。後半はお父さん、お母さんと一緒に、大型絵本・地域スタッフの方たちによるペープサートを楽しみました。サンタさん、子サンタさん2名が登場！一人一人にプレゼントを配ってくれました。みんなお待ちかねのランチタイム。あっという間に、楽しいクリスマス会が終わりました。

※文部科学省主催 女性研究者研究活動支援事業 合同シンポジウムに参加してきました！

平成24年11月20日にJST東京本部にて、「次世代女性研究者支援」－女性研究者研究活動支援のこれからを見据えて－というテーマのもと開催されました。今年度は、初めて医学系機関分科会が設置され、活発な議論が行われました。

お知らせ

■病児保育室の平成25年度新規・継続登録

平成25年4月1日（月）より開始します。

■講演会を開催します。（大学院教育ワークショップFDと合同開催）

テーマ：「女性はもっと活躍できる」
講　師：岩田喜美枝氏　資生堂顧問（元資生堂副社長）
日　時：平成25年3月2日（土）午後1時～
場　所：ルビノ京都堀川（上京区堀川下長者町）

■「女性医師・研究者等支援相談窓口」のご案内

キャリア形成及び研究とライフイベントとの両立などの相談窓口を開設しています。是非ご活用ください。（女性医師・研究者（含む非常勤）大学院生・学部学生を対象）
男女共同参画推進センターe-mail：miyako@koto.kpu-m.ac.jp
TEL：075-251-5165　詳細は、HPをご覧ください。

編集後記

国の補助金による女性研究者支援モデル事業も最終盤に入り、今後も大学独自の取組へとつなげられるよう学長をはじめ皆さんの厚い応援をいただき心強く思っています。トリアス講演会での浅井先生のお話にもありましたように女性も男性も仕事も人生も充実できる環境作りをさらに前へ進められたらと願っています。

男女共同参画推進センター

〒602－8566　京都市上京区河原町通広小路上ル梶井町 465
電話（FAX）：075－251－5165
Eメール：miyako@koto.kpu-m.ac.jp
URL: http://www.f.kpu-m.ac.jp/j/miyakomodel